令和4年5月26日（木）陸奥新報（3面）

健康寿命延伸へ成果

弘大と弘前市連携「いきいき健診」スタート

内臓脂肪の多さ 認知機能関係性 データ基に論文も

指先の器用さの調査を受ける受診者（左）

弘前大学と弘前市が連携し、高齢者の健康状態を10年間追跡調査する「いきいき健診」が25日、同市の岩木文化センターあそべーるで始まった。認知症の解明と予防、治療法の確立を目指す全国的な大規模調査の一環で2016年度に始まり、市民の健康寿命延伸も目的とする。大学関係者によるとこれまで収集した健康データから、内臓脂肪の多さと認知機能低下の関係性について論文が発表されるなど、成果が表れている。（石田紅子）

健診は隔年で受診する仕組み。今回は16年度に初めて参加した市民が、18、20年度に続いて3回目の追跡調査となった。会場には味覚や歩行、指先の器用さなど多方面から認知機能を調べる項目を含めた20ブースが設けられ、31日までの7日間で約800人の健康調査を行う。初日は桜田宏市長が視察し、実際に数種類の検査を体験した。

新型コロナウイルス感染防止のため、受診者はワクチン接種を3回終了した人に限定したほか、10分間隔で受け付けして人数を制限し、順路も一方通行にするなど対策を講じた。

初日は114人が受診。脚の筋肉の衰えを歩行速度で見る歩行調査や金属の部品を板にはめて指先の器用さを見る調査、タブレットを使った認知機能の調査などが行われた。受診した男性(74)は「70歳を過ぎると1年ごとに老化を感じる。自分の体がどう変化しているか細かく診てくれるのでありがたい」と話した。

同健診は16年度からの10年間、弘大や九州大学など全国8拠点が全国1万人を対象に行う大規模調査の一つ。同健診によってこれまで集めた健康データを踏まえて弘大大学院医学研究科の中路重之特任教授は「おなかの中の脂肪がたくさんたまっている人は認知症にややなりやすいのではないかという結果が論文として発表されている」と紹介。今後の展開に「全国規模で日本人の認知症をどう予防していくかという結果が出てくればうれしい」と述べた。